

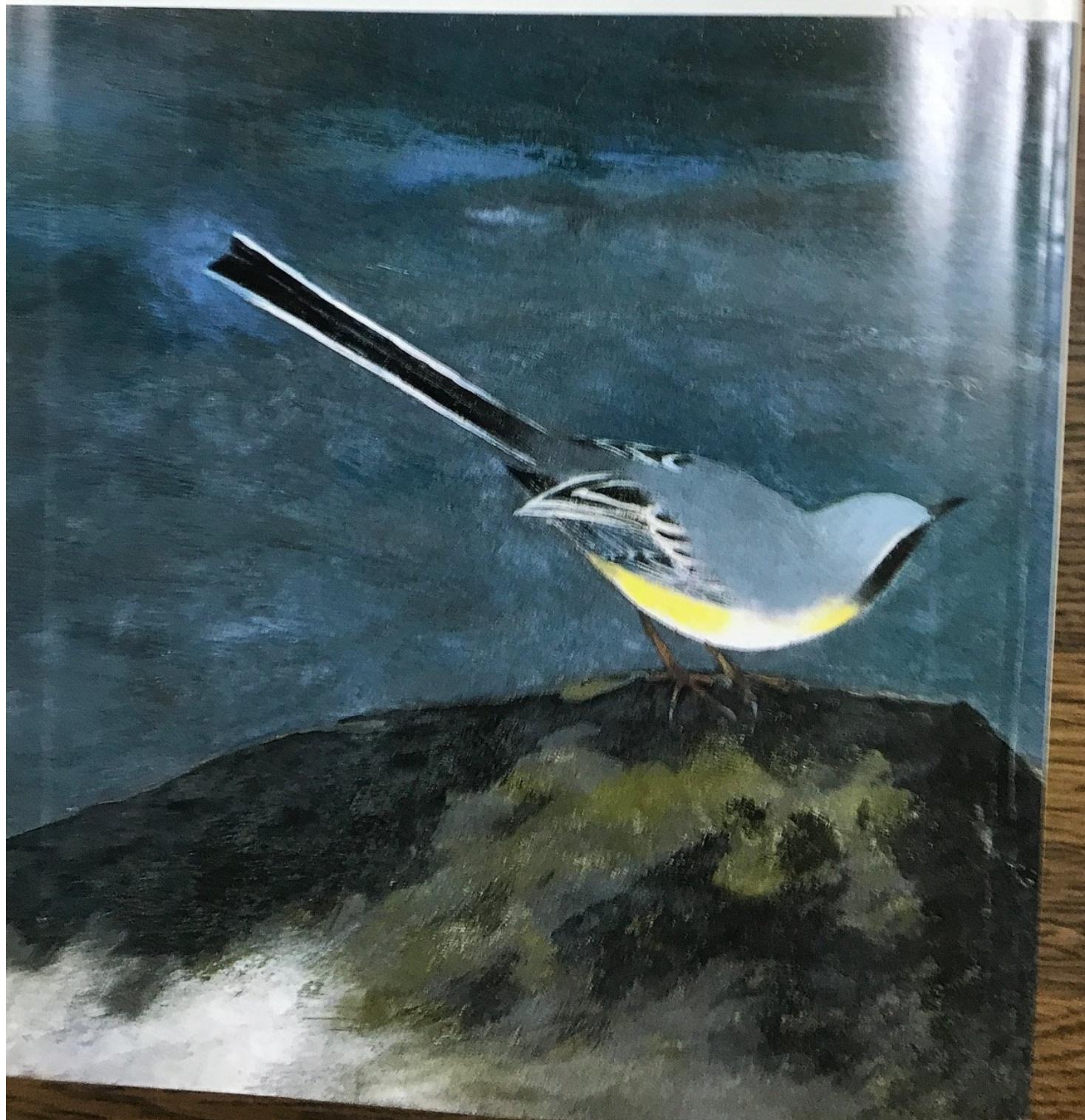
昭和20年12月1日第3種郵便物認可 平成7年5月1日発行(毎月1回1日発行)1324号第110年第8号

# 中央公論

開発と終末論—ポスト・バブル 日本の二つの極 青木保

大蔵官僚の功罪 村川一郎 柳原英資

5



中丸公論 一九九五年五月号 第八九号

令月の言葉 マネー・ゲーム  
言葉の不思議……………川  
近づく試写事情……………川  
筆……………川  
ボトックス……………川  
随筆……………川  
アモル・ボタク……………川  
雜木林を好み……………川  
アモル・ヨコヅの古本……………川  
大事件の続発はたんなる偶然か……………川

（30）

## 開発と終末論 日本の「うの極」

大蔵官僚の功罪

青木 保

## 大蔵省の研究 なぜ可能か

大蔵省支配は

彼らは裸の王様だ

北川 章一

## ブル円高解消のシナリオ 伊藤元重

眞の復讐とは、果者などに負けない経済システムを再構築することである

## ア・ジア経済の成長は奇跡か幻か?

争論

F・ギブニー／ロベッカ・ワサイン／ラ・クロイスクス／ローリー

（オーリン・シマズ）

## 安心保障システムの提唱 島田晴雄

いままもス、ドル資産への投資が長期的には利益をあげる可能性が高い

## もう一人の日本異質論者への反論 横原英資

優秀なる大蔵官僚の神話から解放されない限り日本経済は変わらない

## 瀬島龍二 謎の半生をいま語る 田原紹一朗

文化に対する理解なき安易な官僚批判は意味がない

## 「霞が関ことば」入門講座 田原紹一朗

戦後50年の生き証人に聞く（5）

## JTB前北京“中国的社交術”指南 鈴木勝

知らずにいると損をする、わが日の九段人の文章術

## 事務所長の「中国的社交術」指南 鈴木勝

中国ビジネスでは關係（コネ）孚し単取扱は必須だ

## 仏教百年祭 意氣揚々のゴーモン社 武井東子

バーリングズ倒産と信組救済

## ワーフナー（Ⅲ） 大作家たちの履歴書（9） 三枝成彰

日本ジャズ界の第一人者たちが語り合つ、世代を超えた体験的音楽文化史

## 海を渡つた音樂 尾井正一

小山、中原を越えついに史上最強の棋士となるのか

## シンドウム 羽生善治という男 河口俊彦

ジャズで語る日本大衆文化史

## 「霞が関ことば」入門講座 大山、中原を越えついに史上最強の棋士となるのか

## 賛同者 羽生善治と「霞が関ことば」 河口俊彦

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

## 責任の原理 平兼虎

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

## イノシンシ 加藤尚武

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

## 笑わせえるすまん 浩志

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

## ヨーロッパ国家としての米国 R・ホルブルック

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

## ユーロスマニア崩壊の記録 W・ジマーマン

「有名美術館の作品は本物」と思いこんではいるのか

著者カット工藤恒美・山内利樹・いしいひさし・青木志雄・杉本誠・松下長子・松田雅・



カラー ★ランドスケープ'95⑤〈東日本橋演劇出版社〉撮影:瀧口正人・大男の背中  
『中田喜直』撮影・文、高橋和幸 ★私の書影(中野不二男)撮影:高  
辻武蔵 ★日本を嶺ぐ異邦人⑤(ギルバート・オゼル)著影・文并上博美・江原伸  
子育て教育(撮影)・文、吉原一剛★シリーズ対談、「エバ・ブニョラ」(吉原義  
と川高)に攻撃された岡西経済の行方・山本信孝・岡田一男★おみやげ・現代史を  
いく舞台⑤(平須山)撮影・大村次郎  
グラビア ★シリーズ・ユネルギー・マジメントの時代⑤(近藤健介・石井威智留・ルポ  
ビジネス・フロンティア)著影・文、篠崎洋行  
コラム ★俳句で一服…岸本尚毅・85★政治天皇・瀧島龍二・田・ランド  
スケープ'95⑤解説・瀧島龍二…21★現代をつくった舞台⑤(佐藤正康・田代正  
康・田代正和・三十一文字のレット…辰万智・23★田村隆一の人生相談・浜・ホット  
イン・89)

# JTB前北京事務所長の「中國的社交術」指南

鈴木 勝  
すずき まさる

改革・開放政策で熱気をはらむ中国。近代的な法体系の整備に懸念だが、『人治』の中国はまだまだ続くだろう。ビジネストラブルを回避しより成功をおさめるための中国式『関係(コネ)学』単位取得を伝授する

最近の中国の活発な経済の動きを受け、日系企業もかなり進出し、多くの駐在員が中国で活動している。短期や長期でのビジネス出張者も含めれば、相当の数字に上る。こんな状況の中で中国人が中国社会に溶け込み、中国人とうまくやっているかといえば、決してそうでもない。摩擦や行き違いで悩んでいる人が意外に多い。さらに改革・開放政策が進展すれば、中国人とのつきあいもますます増えてくるだろう。そこでいろいろなトラブルの解消や回避のた

めにわたしの体験的・チャイニーズスタイルの社交術を披露しよう。

とはいっても、中国流・世渡り術には決まった方法があるわけではない。いつ

てみれば、「中国人間」の研究に始まり、これで終わる。中国での四年間の駐在生活は正直いって、「中国人間」に面食らう毎日だった。しかし、体当たりでぶつかっていくうちに、「中国人間」が少しずつ見えてくる。「中国人間」を私流に「〇〇人間」や「×××人間」と括つてみた。普遍的にまとめるのはどうてい無理

なことは承知だ。しかし、思い切つて「中国人間」への接近を試みてみよう。そこで、まず「中国人間」との生活で登場するのは人間関係(コネ)論。

## ☆関係(コネ)学・実践「人間」

中国社会は人間関係で成り立つている。したがって、「関係(コネ)学」の単位取得は必須。しかも優秀な成績を取る必要がある。もちろん、日本でも重要なことであるが、「関係(コネ)学」の効果がこんなにも直接的に、また頻繁に現わ

れるのは日本の比ではない。中国ではこの「学科」をおざなりにした場合には、たとえ法律や規則上、可能であつても、実際面では膠着状態に陥ってしまう。

北京での日常生活で、数多くこんな言葉を耳にした。ビジネスや毎日の生活でのいろいろな依頼事項や、時には「公」の許・認可事項に対し、「鈴木先生、あなたは老朋友(ふるい友達)だからこの件はOKですよ!」

とにかく、中国人社会では「知つていいこと」はなによりも大事。人脈があるとなにごとにも有利に進展していく社会だ。特に「老朋友」の言葉が日常生活で頻繁に登場し、ハバをきかしている。したがって、「関係(コネ)学」の習熟のため、あの手この手の作戦が展開される。

ある時、いつも横に座つてサービスしてくれるホステスが、その晩は全員立つ

## 三のシーンを紹介しよう。 (その1) 公安メンバーのカラオケを見回る図

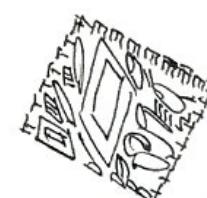
最近の夜のエンターテインメントの代表格のカラオケは、すっかり中国スタイルに模様替えして定着した。大きなスクリーン、立派なステージ、そして時には美人の司会者もいる、という具合。中国ではカラオケ・バーのホステスはお客様のそばに座つてはいけない(らしい)。しか

し立つたままのサービスでは競争の厳しさこの業界では一步先んじることはできない。例に漏れず、この店は横に座つておらず、お客様の歌うのを聞いた後、ほどなくして引き上げてしまった。公安が出て行くやいなや、ホステスたちは客のそばに座り、普段のようにサービスを始めた。そういうえば、こんな光景もあった。

四、五人のグループが席を占め、ワイワイと叫び、カラオケに興じていたが、なんとなくカラオケに来るような格好のメンバーではないようだ。店のマスターに尋ねると、「公安関係者」だという。「時折り、来ていますよ」と答えた。この店は飲み物やカラオケでの接待、いわゆる「関係(コネ)学」に精を出していたのである。

## (その2) カレンダー＆タバコをプレゼントする図

これはコネ学入門編。まず、カレンダー。十二月に入ると、各組織・企業間でカレンダーの贈呈が頻繁に行なわれる。



特に日系企業のカレンダーは喜ばれる。  
①世界の美人や映画スター、②子供、③  
水着スタイル、④日本人の着物姿、⑤風  
景などがいま、中国で比較的、評判がい  
い。日頃のビジネスをさらに円滑にさせ  
るためにも、カレンダーのプレゼントは  
意外に効力を發揮する。

次にタバコ。これはあらゆる場面で見  
られる。北京のわが事務所には日本から  
時折り、きれいな印刷のバンフレットや  
ポスター類が送付されてくる。通関手続  
きが時には難問になる。これらは決して  
高価なものでなく、また商品価値がそれ  
ほどないにもかかわらず、びっくりする  
ような通関料を宣告される。こんなとき  
にはタバコのプレゼントが想像以上に威  
力を發揮する。

とにかく、日常のちょっとした依頼事  
でもタバコが効を奏す。「人間関係論」  
がいろいろなところで顔を出す。

(その3)釣りに招待するの図

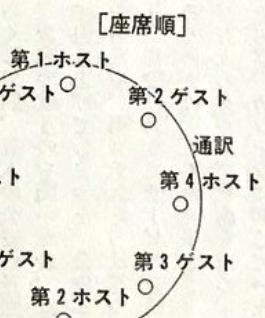
最近、北京で流行っている「関係(コ  
ネ)学」の例。得意先を釣りにご招待す  
る。まず、自動車で出迎え、釣り堀に行

く。釣り道具一式をプレゼントし、釣り  
に精を出す。昼食つきで、一日頑張り、  
帰りには土産に魚を準備する。釣り堀に  
は事前に連絡をし、「釣り堀の魚に二、三  
日餌をやらないようにしてください!」  
と手回しよく手配をする人がいる。ここ  
までくれば、関係学の極意をマスターし  
たも同然である。

これ以外にも関係作りにはいろいろな  
作戦が登場する。しかし、中国での関係  
(コネ)学の実践舞台は何といつても「宴  
会」。これは次章にゆずろう。

最近の中国において「関係(コネ)学」  
にまつわる犯罪がクローズ・アップさ  
れ、時折り贈収賄罪に問われた事例が新  
聞に掲載されることがある。しかし、「関  
係(コネ)学」は決して非難されるべきで  
はなく、程度の範囲を弁えれば「立派  
な」日常生活の潤滑油になるのである。

図表にすれば、次のようになる。



【座席順】  
一テーブルはだいたい、一〇人。四〇

★宴会大好き「人間」

「宴会」は中国に行つて避けては通れない。特にビジネス出張などの時には絶対に欠かせない。また、「関係(コネ)学」

国で催されている。ここでちょっとおもしろい「チャイニーズ・ブッフェ」の紹介をしよう。このスタイルが輸入されて歴史が浅いせいもあって、料理を口にするまでが大変である。

こんな風である。宴会会場の中央のテーブルに西洋、中華、ときには日本料理

ろ。料理のテーブルから離れず、皿の料理を口にしつつ次の料理に並ぶ。ある程度、満腹になるまで料理テーブルは人垣の輪が途切れることなく続く。新たに人が割り込む隙がない。かくして、遠慮がちな人は料理にありつけず、飲み物を手にしつつ、まず口にするのが「食後のデザート」だけとなる。やつと人垣がうまれてテーブルに近付くと、おいしそうなものの大半はなくなっている。こんな光景に何度も出会った。

やつぱり、中国の宴会は多少の堅苦しさがあつても、円テーブルの正統派中国式宴会がいい。

円テーブルでの料理の出し方は真ん中の皿にドツと並べられ、全員がそれぞれつくりやり方が伝統だが、最近、各々の皿に盛りつけられて供されるスマートさも中国に現われ出している。

近頃の中国式宴会の飲み物もずいぶんと変化している。白酒(高粱、トウモロコシ、ヒエなどの穀類を原料にした無色透明の蒸留酒。アルコール度は五〇~六〇度の強い酒である。貴州省の茅台酒は特に有名)、



俗に老酒と呼ばれる紹興酒、そしてビールもあいかわらずだが、最近の流行の“生”ビールは真冬の北京でも好評だ。“長城ワイン”などの合弁ワインも中国の宴会では幅をきかせ始めている。乾杯ワインは度数もなく景気づけによいのだろう。それにしても最近の宴席からは白酒がめつき減った。

さて、宴会漬けの北京での生活であつたが、中国人の宴会での不思議な習性を少しばかり披露しよう。

(その1) いつも料理を残す中国人

中国人に招待された場合に、日本人はサービスされた料理をすべて平らげようと懸命になる。そして、後半に出てくる料理には手が遠のくのが常。地方、一緒に招待された中国人はマイペースで平然と残す。

こんな話を聞いた。「招待された料理は四分の一か三分の一くらい、残したほうがいいですよ。ホストに対して”もういっぱいです、これ以上食べられません”という意思表示になるから……。す

換が行なわれる。エールの言葉に窮したときには「看杯」(ジーッと杯を見つめる)作戦が登場することもあるが、とにかく何かの言葉を交わす。このエール交換で宴席がさらに華やかになる。

「乾杯！ 乾杯！」と中国人の仲間に執拗に迫られたときの対策を一つ。「随意」といつて、相手の督促をかわす方法もある。念のため。

(その4) 運転手の食事券つき招待宴会状

北京にいるとき、多くの招待状が舞い込んだ。また、反対に発送した場合もかなりある。中国では招待状と一緒に奇妙なクーポンを送付する習慣がある。ゲストのおかえの運転手用の食事券である。日本ならゲスト側で処理することなのにと思われるが、中国ではホスト側が準備しないと大変だ。

しかし、ホスト側が忘れてる場合でも、運転手はちゃんと請求くるちやつかりしたところもあるけれど……。とにかく、食事券または相応の金銭を準備しなければならない。

べてを平らげるとホストはまだまだ胃袋に余裕があると解釈するもんですよ」。これを耳にしてから、招かれた場合に心ではもつたないと思ひながらも少しは残すように心掛けた。

この習性は中国人の“ミエツ張り”“面子”人間をあらわすものなのだろうか？ それにしても宴会ごとに残された料理はもつたいない。これがすべて胃袋に入ることができたら、中国全土でどんなにか費用が浮くだろうにといつも考えていた。ある時、中国政府当局はこんな珍しいお達しを出した。「宴会の料理はぜんぶ食べよう！」

(その2) 中国人はなぜ酔わない？

中国人との乾杯は数知れず。しかし、中国人は酔っ払ってヘドを吐いたりしない。私のほうが酩酊し、介抱してくれたオフィスの中国人の女性スタッフに翌日、かなりのお灸をすえられた。日本では酒の上での失態は多少許されるが、中國ではことにこの面では厳しい。

ところで、中国人はなぜ酔わないのだろうか？

☆なんでも一番“人間”

こんな国も珍しい。とにかく“一番”が大好き。評価が天と地ほど違う。まづ、例を挙げよう。「ナンバーワン」と「セカンド」との差が紙一重という例もあるのだが。

たとえば、日本から経済ミッションが訪問する。このようなミッションには「団長」、「副団長」、「秘書長」などの職務づけがなされるのが通常の訪中形態である。中には団長、副団長の差が歴然としている場合もあるが、ほぼ同格で便宜的に役を付けたに等しいケースが多い。

他方、「ナンバーワン」に位置する人物には会議でも宴会でも格段の差がつけられる。会議の進行方法は中国と日本のトップ同士のみが話し合い、周囲が“御意、御意”とうなづく風景となる。団員メンバーの意見が飛び交う西欧社会でのミーティングに慣れた最近の日本人は面食らう。

「トップ」ばかりではない。同類の“一流”、“最新物”、“ブランド”、“ベスト”なども同じ傾向があり評価基準は高い。ある中国の大企業が最新鋭のコンピュータを導入したが、ついにこなしえなかつた例も聞いた。使いこなせる人間がいるか、技術があるかどうかは問題でなく、とにかく“一番いい物”を使うことに意義があるのだ。

「最先端のブランド」を追うのも中国人の気質だ。上海は中国の中でも特にファシズムに敏感な土地。上海の女性が最新のファンションに身を固め意氣揚々と街を歩く姿に北京の女性も憧れる。わが

理由は、酔っ払つたら、身ぐるみ剥がされたり財布をとられたり、また、一瞬の油断も許さない危険を常にほらだ戦国の世の中を、何千年もくぐつて来た中国人の経験がそのようにさせたというのだが……。

どうやら酔っ払つて公園のベンチで夜明かしするのは、太平な日本人だけのようだ。

(その3) 何のために乾杯？ “為了了！”

宴だけなわ、テーブルの上にはビール、ワイン、紹興酒、白酒がズラリと並んでいる。四テーブルの横で中国の友人の丁女史が紹興酒を杯に注ぎ、盛んに催促する。もう、これで何杯目だろうか？ そのつど、「中日両国の友好のために！」、「われわれの健康のために！」、「両社のますますの繁栄を祈つて！」……などな<sup>タラ</sup>。

とにかく、“為了了！”(何々のために！)を言わせる。この丁女史だけではなく、一般に中国人は酒席の際には酒に至つた前口上が必ずあり、さらに各種のエール交

事務所の女性スタッフも上海の出張の際にぜひ買いたいと日頃から貯金に精をだす。「トップ」の文字と同じぐらいに価値を認めるのが「最初」。わが会社の重役が北京を訪れた。その際、表敬訪問に「最初」にどこへ行くかが大問題だ。中国人は初めてどこを訪問したかにより、どこの会社が一番重要視されているか、また相手の訪中の真意は何かを探ろうとする。訪問すると、「いつ、北京に来られたのですか?」との質問が必ず投げかけられる。到着してから三、四日経つての訪問だとあまりいい気持ちでないことが読みとれる。

とにかくビジネス・ミーティングを成功させる方法は、中国に到着後、最重要箇所を最初に訪問すること。国際線の空港から直行することである。多少の延滞の旨を事前に申し出でれば、より話が弾み、契約締結まで到達すること必定だ。「トップ」を好む中国人らしく常日頃の生活の中に、ウームと唸りたくなるような命名があちらこちらにある。

- ①中国人の性格が話し合いを好むのはもちろんだが、現在の社会主義体制の決議方法に起因し、合議制に依るうとする。
- ②会議招集者の「自己顯示欲」が見え隠れするのも中国での特徴だ。総經理(社長)などのトップが変わると頻繁に開催される。もちろん、トップの政策を徹底させることを内外に顯示したいという願望がある。
- ③参加者側にも、会議出席者になることは一種のステータス・シンボルになっている場合も多い。また、遠距離地での会議出席は公費で国内旅行ができる、役得であると考えているのでなおさらだ。
- こんな理由からあちこちで会議が頻繁に開催されるが、ちょっとした会議もその関係者で膨らみ、おおげさになるのも中国の特徴だ。
- 中国の会議にはこんなサイクルがある。「会議」→「宴会」→「観光」→「土産」と連想ゲームもどきのイベントが付随する。



①中国人の性格が話し合いを好むのはもちろんが、現在の社会主義体制の決議方法に起因し、合議制に依るうとする。  
②会議招集者の「自己顯示欲」が見え隠れするのも中国での特徴だ。総經理(社長)などのトップが変わると頻繁に開催される。もちろん、トップの政策を徹底させることを内外に顯示したいという願望がある。

③参加者側にも、会議出席者になることは一種のステータス・シンボルになっている場合も多い。また、遠距離地での会議出席は公費で国内旅行ができる、役得であると考えているのでなおさらだ。

こんな理由からあちこちで会議が頻繁に開催されるが、ちょっとした会議もその関係者で膨らみ、おおげさになるのも中国の特徴だ。

中国の会議にはこんなサイクルがある。「会議」→「宴会」→「観光」→「土産」と連想ゲームもどきのイベントが付随する。

のツメと中国で必須の「関係(コネ)学」が促進されるのであればしようがないのだろう。

加えて、「観光」。いまの中国では国内旅行はまだまだ日常的に頻繁ではなく、生まれた土地以外に行つたことがないと

「天下第一関……山海關」、「天下第一雄関……嘉峪關」、「天下第一水……濟南」、「天下第一靈山……泰山」、「天下第一江……長江」、「天下第一奇觀……雲南省・石林」、「桂林山水甲天下」(桂林の山水は天下一番だ)。こんな命名や形容をされると素晴らしいような、ありがたいような感情が湧くのも人間の心理。

さて、次に掲げる命名も「ナンバーワン」を志向する中国人の習性による発想からであろうか? 「ランク付け」が本当に好きである。

- ・三大石窟……雲岡(大同)、龍門(洛陽)、敦煌莫高窟
- ・四大美人……楊貴妃、西施、王昭君、貂蟬
- ・四大奇書……三国志演義、水滸伝、金瓶梅、西遊記
- ・中国五岳……東岳(泰山)、西岳(華山)、南岳(衡山)、北岳(恒山)、中岳(嵩山)
- ・六大古都……開封、洛陽、西安、北京、杭州、南京
- ・八大名酒……茅臺酒、汾酒、西鳳酒、

いう人々もかなりいる。したがって、みんなが喜ぶ名所旧跡の観光地を組み入れるのが上手な主催者である。最近は昼の宴会が何日間も続ければ、その間の食事はたいてい、主催者側の負担となる。昼食&夕食が華やかな宴会に早変わりすることになる。これで会議での懸案事項

(故宮)、頤和園、万里長城などに多くの地方からの旅行客が増えている。通常の物見遊山の旅行客の中に多くの会議好き「人間」が混じっているのはたしかである。

最近、北京市内の、たとえば、紫禁城(故宮)、頤和園、万里長城などに多くの地方からの旅行客が増えている。通常の物見遊山の旅行客の中に多くの会議好き「人間」が混じっているのはたしかである。

日本人は一人では虫に、三人になると竜になり、中国人は一人では竜に、三人になると虫になる」

こんな言葉があったが、駐在中の実感はまったくそのとおりであった。

「中国には坂本竜馬のような若者が多いな……」。縦横無尽に活躍する中国の若者をそんな人物になぞらえてみたこともあった。日本の若者と比較した場合、

全興大麴、紹興酒、煙台のブドウ酒、烟台のベルモットおよび金獎ブランディー・八大料理……山東、四川、江蘇、浙江、廣東、湖南、福建、安徽

### ☆会議好き「人間」

中国では「会議」がやたらと多い。日本も多いが、会議好き「人間」のレッテルはどうやら中国人に貼つたほうがよいだろう。オフィスでの会議室とともにいわゆる「持ち出し会議」が多いのも中国の特色で、これが好評を博している。

例えば、紅葉で名を馳せている北京郊外の香山がある。もちろん、秋以外も北京人にとつて憩いの場として親しまれている。そこの香山飯店(ホテル)で四日、五日間の会議などは驚くにあたらない。規模が大きくなると、遠く南部の桂林、古の都の西安、三国志で有名な成都など、不思議と名所旧跡での会議が多いのもいまの中国の会議開催の特徴である。中国において会議がこんなに頻繁に、華やかに行なわれるのもそれなりの理由がある。

中国の若者の行動力の優秀性をつくづく感じた。

若者だけではない。年配の中国人でも敬意を表したくなるような人物に多く会つた。一対一で中国人と日本人とが競争したらとうてい歯が立たないだろうというのが率直な印象だ。しかし、どこの世界へも一人で飛び出していつて決してヒケを取らないと思われる中国人が、三人集まるとき端に「虫」のように力が低下するのも不思議だ。

こんな例がある。

北京のある大きな旅行社の日本部。日本部部長の下に有能な三人の社員がいた。當日頃から三人とも上司の日本部長を快く思つていなかつた。改革・開放の進行する中で野望を燃やしていた。ときあたかも新組織を発足する機運が芽生え、近頃脚光を浴びてきた「出来高制」を前提に新組織の部をスタートさせた。三人が中心となり、その内の一人が新部長に就任し、他の二人が副部長として補佐役に回つた。お互いに気心も知れ、三人とも大いに士気が揚がつての船出であ

一労働、同一賃金」の社会主義国家のため「商売上手」的な側面が覆い隠されていたが、最近の改革・開放の波がその「覆い」をドンドン取り払つてきていた。

近頃、「第二職業」なるものが登場し、北京で話題をよんでいる。昼間は通常の勤めをし、夜間やワーキングを利用して他の商売に励むのである。

大学教授が夕方から街角に屋台を出したり、新米の病院勤めの医師がカラオケバーのホステスをしたりがその部類。また、街を走る汚れた自動車を素早く呼び止めての洗車屋業いわゆる、「インスタント・カー・ウォッシャー」など、北京の街には珍商売が続々と登場してきている。

従来の社会主義の旗の下ではこのよう

な職務形態は規制されていたが、改革・

開放のもと許されるようになつてきた。

このような状況になると、「ヴェールに包まれていた中国人本来の性格・商売上手『人間』の姿が現われてくる。ます何と言つても、中国人の商売のう

つた。

新組織は内外から注目を浴び、特に三人の有能なメンバーの仕事ぶりは大いに期待された。しかし、一月経ち二月経つ内に、あんなにガツチリとスクランムを組んでいて仲よくついた仕事の段取りにギクシャクする状態が出てきた。組織自体が新しいことや、やつかみも交じり、外部からの圧力もかなりあつた。しかも、徐々に彼ら自身の人間関係に軋みが出てきた。ついに一年も経たず部長の人が離脱し、中国の東北地方に新任務を負い転勤していった。

中国人社会では「1+1+1=3」となるケースはなかなか見当たらぬ。しかし、こんなチームワーク苦手「人間」の中国人だが、別の形で集団化を好む習性があり、力を發揮する。「地縁」「人縁」といつたらよいのだろうか。言葉や生活環境での同郷の仲間意識、そして血縁で結ばれた強い絆は特に顕著である。政治や経済などの分野で大きな影響力を持つているし、海外では地縁・人縁の強い「華僑」が世界中にその名を馳せている。

### ☆商売上手「人間」

まさは商談である。人の心を上手に掌握し、時間をかけて粘り強くやる。バス・列車や飛行機に乗り込む時のあのなんともいいようない慌てぶりとは対照的なのが、商談時の沈着冷静で悠然たる姿勢である。

ビジネス・ミーティングの後にはお決まりの宴会。この宴会の席では思う存分相手をいい気持ちにさせて商談の駄目押しをする。こんな調子ではせつからず單細胞的性格の日本人ビジネスマンの大部は参つてしまふ。

商売上手の一例を。

商談や宴会の最中にやたらと「為す・」<sup>ケイフ</sup>中日友好(中日友好のために)の言葉が行き交う。この言葉が登場する場面は大概、日本側が譲歩をしなければならないような場合だ。

こんなケースがあつた。ある組織に日本からの訪中ミッションの宿泊、移動、交流の受け入れをお願いし、すべての経費を事前に見積もつてもらつた。しかし、提出された見積もりコストはどうしても高すぎる。一般的の価格と比較すると

しかし、「三人になると虫になる」わりには中国人は三人になることが好きだ。というよりか、大勢で集まり賑やかにすることを好み。世界で中国人ほど一人でいることを嫌がる人種はないのではないかと思うくらいだ。

その典型は食事のときだ。一人で食べている中国人の姿を見ることは皆無だ。中国人の食卓ではそれこそ常にワイワイガヤガヤと賑やかだ。

中国人は日本のように一人用の「中華定食セット」なんて発明してくれそそうにない。一人の場合はボリュームはあるが、品数の少ない貧相な食事になつてしまふ。したがつて、一人では中国料理ではなく、「日本料理」や「ウエスタン料理」になつてしまふのはやむをえないのかかもしれない。

### (その1) 公安「会社」・バトカーパー出張サービス

載されている。バズーカ砲もある。

「公安」は日本の警察にあたる。他国の大統領や首相などのVIPが中国を訪問する際には、必ずバトカーパーが出動し先導する。ところが、それほど重要でない経済ミッションや一般的の団体にもバトカーパーが先導するケースがある。

ある時、こんな話を聞いた。「三時間、××××元でバトカーパー先導サービスが受けられます」と。ほんとうの話だ。帰国後に、最近のインフレでこのサービスの相場が急上昇しているというニュースも伝わってきた。これは外国からのVIPが中国滞在中、予定通りに旅程をこなしめることに役立つとの理由からのことだ。

（その2）人民解放軍「会社」・中国北方国際射撃場

日本でなら到底できそうもない商売が、中国では大繁盛だ。

この射撃場では各種大小の銃のどれを使用してもよく、それぞれの使用料が記されていることに役立つとの理由から深い

みに対する回答の遅さは、「常識」（これは西欧社会の常識）では考えられない。とにかく、なかなか回答が得られない。日本企業の北京の支店長や所長にとって、自分の会社の社長や役員の「アボイントメント」となれば、神經が苛立つのはこの上ない。日系企業の本社は、中国の事情も知らず、矢継ぎ早やに催促する。しかし、どんなに早く申し込んでも中国側からの返事はこない。

こんな例があった。日本の企業のトップ経営陣メンバーが、経済ミッションと称して、八〇人ほどで中国を訪れた。団長は名の知れた政治家で、彼を先頭にしてやってきた。北京には五日間の滞在だ。参加メンバーが所属する企業のほとんどは北京にオフィスを構えている。主だつた企業のトップの訪中で何週間も前から受け入れ準備をしている。特に北京の各支店長・所長同士の下打ち合わせも縦密だ。経営者メンバーの滞在中のスケジュールもびっしりつまっている。中国側では江沢民総書記や李鵬首相との会見の予定も入つていて。

ライフル銃の後、バズーカ砲の試し撃ちをしてみた。バズーカ砲を原っぱまで狙いで行き、撃ち方の指導を親切に受け、はるか彼方の標的に向かつて撃つた。当たつたのか当たらなかつたのか、定かでないが、標的付近に濛々たる土埃が上がつた。一発三八〇元は外国人の身でも少々高いとは感じたが、日頃のモヤモヤの解消には大いに役立つた。

「人民解放軍会社」は、この射撃場ばかりでなく、北京市内では五つ星のデラックス・ホテルも経営しており、その多角経営ぶりはつとに有名である。

（その3）商工管理局「会社」・外国会社登録／更新業務出張サービス

外国企業は定期的に会社登録を更新しなければならない。日本でなら弁護士事務所や司法書士事務所が管轄し、この事務所に依頼し、代理人が役所に出頭して登録・更新業務を行なうのが通常である。

日本にもないこんなサービスが中国に誕生した。それは「当該」役所のスタッフ

が、もうそんな心配はない。そう思え、最近の北京にはこんな「飛躍的&珍しい」サービスがお目見えしている。

☆約束じらし「人間」

ビジネス界では会議・打ち合わせのために頻繁に行なわれている「アボイントメント（約束）」。インターナショナルな動きが盛んになってくると、外国からの申込みもかなり頻繁になつてくる。しかし、これが中国では一仕事なのだ。西欧諸国でも一ヶ月以上前に申し入れを行なう例もかなりある。相手の身分や肩書が上になればなるほど、「アボイントメント」を要求されるのが一般的である。政府高官になればなおさらである。

ところが中国ではアボイントの申し込

しかし、確定ではない。訪中団が北京の空港に到着した時でさえまだ決まっていない。そのほとんどは会見の前日に決定する。大部分が予定した時間でなく、異なつた時刻である。発表されるや否やスケジュール調整で大騒ぎが繰り返さりなしである。

とにかく、中国側との「アボイントメント」に関しては話題に事欠かない。なかなか挿らないこともある反面、急速の申し入れの場合は万難を排して迎えてくれることも多い。

こんな例もあった。

北京で開催のアジア大会の入場券の発売に関する件で、わが社の本社の部長が北京を訪問するテレックスが入つた。緊急な案件で、決定してから二、三日後の訪問であり、北京にたつた一泊というスケジュールであった。お目当ての関係機関のトップへの「アボイントメント」に対する返事はついにフライ特の出発日までない。直前だからしようがないと諦め、徒労に終わつてもわが社の熱意を示さないと日本を出発、北京に着くと、そのまま先方のオフィスに直行した。意外にも、お目当てのトップがお出迎え、加え

て完了してくれる。

「この書面とある書類を××日までに準備してほしい……」といえば、あとはだまつても完全にしてくれる。それまでは書面不十分でなんども突っ返された



て懸案事項も満足のいくかたちでまとまつた。中国側とのアボイントには、直前も骨の折れる仕事だが、それと同時に意外な展開をみせる。それにしても駐在中、「アボイントメント」に関しては神経をすりへらした。

中国側には中国側のそれなりの理由がある。政府の上層部になればなるほど、行動が外部に知れてしまうと困るという保安上の問題もあるようだ。

こんな「アボイントメント」の習わしも最近の改革・開放の影響で、民営化された機関での悪弊は消えつつあり、政府機関もそれに習いつつあるのは嬉しい。

### ☆直前ダッショウ『人間』

中国人は「直前ダッショウ『人間』」または「突貫工事引き受け『人間』」といえそうだ。

二〇〇〇年のオリンピックは中国人の大きな期待に反して、オーストラリアのシドニーに開催が決定した。北京は立候補後、あらゆる分野で壮烈な誘致運動競争を開催させた。

その一つは北京の道路を一変させてしまったことである。北京国際空港から市内に通する道路、市内の第三環状道路はもはや原形をとどめてはいない。現在市販されている北京市街地図からはとうて内に通する道路、市内の第三環状道路はい推測できない。こんな大掛かりな道路工事は日本などの資本主義国家であつたら、土地買収などの手続きで何年もかかるであろう。それとともに工事期間も長い年月をかけての完成となる。しかし、中国はこれらをいつも簡単と思えるほど短期間に各種プロジェクトを完成させてしまう。脱帽せざるを得ない。

一九九二年の「北京ジャパン・ウィーク」の際も同様。日中国交回復二十周年記念の一環として、日本の文化芸術の多くが北京に持ち込まれて中国国民に紹介された。

青森ねぶた、神輿、太鼓、阿波踊り、歌舞、劇、日中弁論大会……さまざま催しが日中双方の開催実行委員会で練られた。この計画は成功に向けて二年前から日中双方の担当者がかなりの時間をかけて知恵を出し合つたものだ。北京駐在

はこの二回にわたる値上げ幅。半年前に使用していた「二〇〇元」の領収証のチケットをそのまま利用。「四〇〇元」にすれば、従来のチケットを一枚渡せばよいことになる。さらに「六〇〇元」にすれば、従来のチケットを三枚渡せばよいわけだ。

さらに不思議な思いは突然の値上げや変更の時期である。ウイークエンドや祝日が絡んでの実施である。ばたばたしても文句をいう相手がいす、翌週には空港では実行されている。同様に人民元の切り下げは何度も経験したが、ほとんどはウイークエンド。後者のほうはなんとか理由がわかるような気がするが……。

これ以外にも重要な政府の法律や規則の改廃が一、二日前に発令される。そのため苦情を申し出てもトンとなしのつぶてである。どうやら、「前広」という単語は中国の辞書には載っていないようである。

☆面子『人間』

中国人は非常に誇り高い人種である。そんな誇り高い国民性の一つは「面子」。

例えは、公衆の面前やビジネス会議の席上で、注意されたり、責められたりして面子を汚されるのを嫌う。そして時にはこのことで猛烈な反撃を受けたり、恨みを買ひ、ものごとがうまくいかなくなることがある。日本からのツーリストが中国のホテルなどの服務員（ホテル・スタッフ）へ乱暴な言葉を吐いたとかで予期せぬ意地悪をされたこともあった。日常生活の中でも「面子」の言葉がたびたび登場する。日本人ももちろん面子人間といわれる。しかし、中国人ほどではない。

面子人間の身近な例を北京駐在中に出会った事例からいくつか拾つてみよう。

(その1) プロのガイドとしての面子

日本からのある旅行団があつた。たまたま、知人が付き添いの添乗員として北京にやってきた。さまざまな観察や中国名物料理を賞味する企画などふんだんに入れたデラックスなツアーであつた。中國旅行社も配慮をしてそれなりにベテランのガイドをついた。

の私は両国の間に立つて調整役を引き受けたハメになった。ジャパン・ウェーブ方法論とは平行線。日本側は多少の修正があつともほぼ計画にしたがつて進んだ。他方、中国側は直前までカンカンガクガク、もうこれでは期限に間に合ひそうもないと思われたのが、直前に「ダッシュ精神」と「人海戦術」を繰り返す。どこでどのようにトレーニングしたのだろうか、会場では素晴らしいマスゲームを披露した。

中国ではさまざまな法律や規則がある日突然公表されて、即日実行される。これは仕事が右往左往した空港に絡む税金値上げの話である。

「国際線空港税は二〇元から四〇元に値上げ」（九一年四月十日）と布告されながら、わずか半年後に「国際線空港税は四〇元から六〇元に値上げします」となつた。政府にとって緊急に財源が必要になつてのことであろうが、不思議なこと

くす行為』かどうかがわからない場面がある。

こんな例だった。その会社にとつて創立××周年の記念の宴会が人民大会堂で行なわれた。招待状が直前に到着した。そのときには先約があり、代理出席をさせた。後になつて、この代理出席に対してその会社のトップの面子を潰した……と間接的に伝わつて来た。その後、しばらくは彼に会う度に皮肉まじりの言葉が返つてきたことに對して、改めて「面子を立てる」ことの難しさを知つた。

仕事上、パーティの招待状はよく届いた。重なりあう場合が少なからずあり、その選定に苦労した。招待状が到着するつど、オフィスの中国人スタッフに相談するように心掛けた。

しかし中国式の宴会では二つをかけもちで出席するのはなかなか難しい。

(その3) 面子を立てたら、ついによつぱらに

ぎこちない動作となるが、その習わしを実践すれば、宴会がさらに華やぐこと必然だ。

(その2) ワリカンのない国・中国?

古来より、中国からわが国への輸入は政治・経済・文化・芸術と多岐にわたつている。しかし、中国ではなかなか、見当たらないものの一つに「ワリカン」がある。日本ではワリカンは日常茶飯事。まず、「何か、食べに行こう!」と声をかけたほうがその日の全額を負担するのは中國の常。たとえ、二次会があろうとも同じである。とにかく、中国社会では「全額負担」で誘うか、誘われるかどちらかである。中国を「ワリカンのない国」と称しても間違いなかろう。したがつて、日本のサラリーマンのように、「今夜、一杯やつていこう!」と誘つておいて、勘定の段に「ワリカン」を……というのは中国人社会ではなじまないし、ひどく嫌われる。

とにかく、「面子人間・中国人」と深く関連がありそうな現象もある。社会

い。一テーブルに八〇人。乾杯の連續。ある程度、酒がまわったところで、「鈴木先生、健康を祝して乾杯はどうですか?」と老朋友が歩み寄つてくる。「もう、勘弁してください。飲み過ぎですから……」と固辞すると、「××公司(会社)の〇〇〇総經理(社長)と乾杯して、私は……面子がなくなりますね」と。こんなところにも面子が顔を出してくる。

### ☆珍習慣・おもしろ習性「人間」

北京での日常生活のなかでわれわれ日本人、いや他の外国人から見ても「これはおもしろい!」と叫びたくなるような中国人特有の氣質にいろいろ出会う。「人間」シリーズの最後に中国人の珍習慣・おもしろ習性ぶりをア・ラ・カルト式に紹介しよう。

### (その1) タバコを勧める中国人

世界的にスマーカーは住みづらくなっている。四年ぶりに帰つた東京のあちこちに禁煙箇所が軒並みに増加。駅構内はもちろん、オフィスもだ。最近よく行き

主義国家の大鍋主義のなせるわざなのか? そして、時には商売上手「人間」中国人の計算高い魂胆もチラチラしている。「ワリカンのない国」に加えて、「ごちそうされたら、ごちそうする」風習の国についてはすでに述べた通り。したがつて、招待される場合は招待する時のことを考えること。とくに招待の場合は出費には要注意なのだ。

前回は日本側のお客一人(自分)でホストの中国側が数人。リターン・バンケットはホスト一人に、ゲスト数人。そのゲストがホストの知らない友達を連れてくるなんこともザラ。あげくに先方が日本料理をと望めば、予算がグーンと上がります。そんなことは中国人のお客は意に介さず、好きな料理を注文する。しかし、多少は高くつくが相互の関係はさらに深くなるといふことは確実だ。

(その3) 電話をかけて「あんた、誰!」ではないでしょう!

電話が鳴る。リリリリーン。

私「口畏! 口畏! (もし、もし!)」

先方(大きな声で)「あんた誰?」

来るオーストラリアでは、飛行機はもちろん空港まで禁煙となつてゐる。その点、中国民航の国際線でも禁煙の動きなどではいるが、中国はまだまだ「愛煙家の天国」といえる。

宴会の一幕を観いてみよう。乾杯!

乾杯! のコールが続く。その合間にスマーカーの手は終始動いている。タバコに火をつける前の光景がまた、おもしろい。中国人青年がおもむろにタバコを取り出す。自分の口にすぐには持つてこない。テーブルの両隣りや向かいの仲間に一本一本渡す。ケースが空になるのも構いなし。貰つたほうも平然としている。タバコが行き渡つた段階で、火をつけ、スバスピと吸つてゐる。

時たま、日本からの賓客が宴会に加わる。日本では虐げられてゐる(?)習性が抜けきらないのか、一人でこっそりタバコを取り出し吸い始める。そんな時に中国人の習性と考え方(喫煙の際には仲間にタバコをわけること。こつそりタバコを取りだし、一人で吸うのはケチなんですよ)を伝授する。日本人にとって、とはたしか。

日本でならまず、自分の名を名のり、そして相手側の名前を聞くのが常識だ。この種の習慣になれた日本人には中国人のこんな調子に戸惑い、なから腹を立てることもある。しかし、これも中国の習慣であることはたしか。

数年前、オーストラリアに駐在していることがある。ここも日本と違う対応をする。「こちらはジョン……」とはいわない。受話器を握つて「こちらは987-6543……」と自分の電話番号を告げるだけのケースによく出会つた。名前を告げた場合の危険性を考えてのことであらう。

中國も案外、こんな理由から「あんた、誰？」が発せられるのではないか。もし、電話をかけたほうが先方に「あなたは鈴木さんですか？」と問い合わせるのに「はい、そうです！」と答えて会話を続けた場合、秘密が漏れる場合もある。これは不安感や警戒心から出発した習性だろう。

(その4) なぜか冠称の「副」をとりたがる

「副總經理」、「副局長」、「副部長」、「副處長」など、会議・会談や電話のなかで、これらの冠称「副」を省いて話す場合が多い。実際は「××××副」總經理が先日……」なのだが、会話の中で「××××總經理が、先日……」と聞くと、「あれ、總經理が交替したのか？」と思われる。これは面と向かつた場合もあるし、第三者的に述べる場合にも登場。相手を持ち上げたり、または「お追従」の意味も含まれているのだろう。こんなところにも機微を弁えた中国人の處世術の素晴らしさが見え隠れする。しかし、外国人を戸惑わせることはたしかだ。

「中国では毎月、もらっている給与尋ねても失礼にはならない」と駐在する際に読んだガイドブックには書いてあった。いまもたしかにそうだ。躊躇なく、「二〇〇元です」とか「三〇〇元だよ」と返ってくる。

しかし、最近は本給以外にそれと同じくらいのボーナスや現物支給がある。これは広い中国では地域的特性があるので一概に論じられないが、北京や上海ではかなり多い。したがって、個人個人の賃金額の差が大きく違うようになると、いまでのように公然と回答が返つてこないケースも出てきている。

北京にある大手の旅行社。ここの社員はビジネス出張で頻繁に海外へも行ける比較的恵まれた組織で、中国でもエリートの部類である。最近の海外からの旅行者が激増する環境で給与・ボーナスも多いた。春節(旧正月)、夏休み、その他時に応じて、さまざまな物が現物給与されて

た、「誰？」が発せられるのではないか。

もし、電話をかけたほうが先方に「あなたは鈴木さんですか？」と問い合わせるのに「はい、そうです！」と答えて会話を続けた場合、秘密が漏れる場合もある。これは不安感や警戒心から出発した習性だろう。

(その4) なぜか冠称の「副」をとりたがる

「副總經理」、「副局長」、「副部長」、「副處長」など、会議・会談や電話のなかで、これらの冠称「副」を省いて話す場合が多い。実際は「××××副」總經理が先日……」なのだが、会話の中で「××××總經理が、先日……」と聞くと、「あれ、總經理が交替したのか？」と思われる。これは面と向かつた場合もあるし、第三者的に述べる場合にも登場。相手を持ち上げたり、または「お追従」の意味も含まれているのだろう。こんなところにも機微を弁えた中国人の處世術の素晴らしさが見え隠れする。しかし、外国人を戸惑わせることはたしかだ。

だ。

だ。

いる。

ある年の春節を直前にしての特別なボーナスの例だが、一週間前に新年の魚「たちうお」は市価の半分以下で支給され(残りは会社が負担のこと)、翌日は豚

ゴなどを支給されるとしばらくは、オフィスの机の周囲はリンゴだらけになる。社内結婚も多いこの会社で鳥肉などを支給されると分、冷蔵庫が鳥肉だらけとなるカップルが何組もあるとか。

ところでなぜ、こんなにも現物給与のボーナスが……と首を傾げるのだが、それなりに原因がある。給与に対する政府の税制からこんな策が採られていることはすでに述べたとおり。毎月の給与が四〇〇元を超えた場合には税金の支払いが義務付けられているのである。したがって、給与は四〇〇元未満に押さえ、それを超える部分は現物で支払う。

その会社は一〇〇〇人以上の社員のため、物品を仕入れる購入部がその役目を果たしている。彼らはなるべく安い野菜、果物、肉類を購入するために農民と直接交渉を行なっている。このような例はかなり成績が良い企業の部類。最近このような企業が増加しているのもたしかだ。このように、中国の人々の給与ほど外国人に理解できないものはない。ボーナス

### (その5) 中国での通訳稼業はつらい

日本の首相で英語が達者な人物がいた。アメリカを訪問した際に公式会見を英語で発表した。また、最近の民間企業にも英語を駆使するトップは多く、海外で英語のスピーチを行ない、評価されている。しかし中国ではこんなことはめったにない。どんなに日本語が達者でも要人の挨拶は中国語で行なう。日本と違って外国语に堪能な人物(幹部)が中国には多い。

関係の深かった中国の旅行社のトップで、日本人以上といわれる「日本語の使い手」がいた。公式の宴席では中国語で挨拶する。これをかたわらで通訳した友人が、後日、冷や汗が流れる胸の内を披露してくれたことがあった。中国人の面子というか、格式というか、この現象は今後も続こうそうだ。

### ☆毎月、ボーナス奮起「人間」

この類の「人間」の登場は最近の中国にみられる大変化の一つである。毎月、固定給とは別にボーナス(奨励

金)を支給する会社が増えてきている。これは北京や上海のような大都会でいち早く導入され、いま、全国に広まりつつある。

この奨励金は「資本主義のシッポ」と称され、長く採用されていなかった。しかし、一九七八年に奨励金に関する通達が出され、制度的に認められるようになつた。

従来は働いても働かなくとも毎月決まつた賃金で、大部分の組織では「等級賃金制」と称される賃金システムが実施されてきた。「国家公務員」「一般労働者」および「技術者」に分類し、それぞれに一定の賃金等級を定めた。同一の等級であれば、その能力や勤務状況に関係なく賃金を同一にした。



ナスに加えていろいろの手当・補助という名目で出されるから余計複雑だ。

### ☆“人治の国”はまだまだ続く

中国人は一二億。今まで見てきた“人間”だけでもさまざま。まだまだいろいろな“人間”が登場するが、別の機会にしよう。

ところで、こんな“人間”社会の中国も「関係でなりたつた国」、すなわち「人治の国」と一般に呼ばれている。法制度も社会システムもまだまだ未整備の状態だ。法治より人治が優先しているのが現実である。

こんな現実のもとで、法律・規則がこなつて、あんなつて、といつても、一般的の中国人はそのとおりにはなかなか動かないのもたしかである。交通信号の例をとってもそうだ。赤、黄、青のシグナルに対して全員が色覚異常になってしまったかのように道路上でぶつかり合う人々、その合間にそろりそろり走る自転車、そんな騒々しい風景だ

が、危ういながらも調和をとり、大きな事故もなくなんとか進んでいる。また、街中には駐車に対する「違者罰款」（違反者は罰金！）と書かれてある土地がよくある。しかし、その効果はほとんどなく、自転車があちこちに置かれている。

また、法律の解釈などでは冒頭の「関係（コネ）学」の研究＆実践編での賜物（？）か、拡大解釈や違法行為が多い。

中国に何年も住んでいるわれわれ外国人にとっても、中国の法律・規制を理解するのは難しい。明文化されているのか、いないのかも、定かでない。

たとえ、法律・規制が明文化されいた場合でも、その適用はどのようになっているのか……と首を傾げたくなる時もある。首都・北京では守られているのに、上海や南の広州・深圳では同一国とは思えないような適用が罷り通っている。また、法律や規則に関して朝令暮改めの改廃も多い。

たしかに、最近の中国は大きく変わりつつある。その一つにこんな国民の中国

を近代的な“法治”国家に向けさせようと、現在、法システムの整備に懸命である。また、国民に対する啓蒙にも熱心だ。北京の街角で最近見かけるのは、国絵や図を駆使して法律や規則の詳細な説明をしている。改革・開放政策をさらに進展させるためには外国企業をどんどん誘致する必要があるし、また外国人との契約・約束事項も増加し、法制度の整備が急務であることは事実だ。

しかし、まだまだ一般の中国人の性格や現実生活での行動はどうかといえば、ミスター鄧小平の動きをめぐって揺れ動き、「人間関係（コネ）学」がハバをきかせていく。

“人治”的中国はまだまだ続きそうだ。となれば、こんな「中国人間」と承知の上で接すれば、さらにツキアイは深まるだろうし、駐在などのチャイニーズ・ライフももっと楽しくなるだろう。